

春夏秋冬

所長 下沢孝一

前回、イタリアを旅したのは、もう十五年ほど前のこと、その後、なかなか縁がなかった。初めて訪れたトレビの泉で、いくら小銭(当時は「リラ」)が無いからといってもイギリスのポンドの残りを投げ込んで、泉の神様の怒りが収まるのに少し時間がかかったということか。

今回の旅は、ローマから南へ、アルベロベッロの白い街並みやポンペイの遺跡、アマルフィの海岸など多くの世界遺産があり見所は多い。「広いなー。この国に持っている印象が、少しずつ変わっていく。」

旅の最後は、ナポリでのフリータイム、夕食は、数人で市内のレストランに出かけた。メニューには載っていない念願の「イカ墨のパス

タ」、無理をお願いしていただけばもう言う事はない。また、ヌーボーながら安くておいしいワインなど、食文化のレベルの高さを感じさせられた。

よくイタリアは、「泥棒の国」だとか、イタリア人は、とりわけ南へ行けばいくほど、のんびりしているといわれる。最近では、EU経済圏の一員としてそんなこともいつていられないようだが。いずれにしても、他国の文化やそれぞれの人生観の違いを理解することは一朝一夕にはできない。

さて、木曾寮にお世話になって三年が経とうとしているが、当初予定していなかった大きな出来事があった。昨春秋、木曾寮の特養部門が廃止となったことである。

結果的には、廃止となった特養施設を活用し新養護として再スタートを切ることと

なった。この間、財政的な支援を含めて、多くの方々にお世話になったことは感謝の念に耐えない。

養護老人ホームの入所には一定の基準があるが、簡単にいえば在宅では自立して生活していけない人を、行政が福祉施策として措置入所させるものである。

木曾寮の入所待機者数は、このところ五十名前後を推移している。この数字は、今後ますます過疎化と高齢化が進む木曾においてどうなっていくのだろう。

とりあえず、我々団塊の世代が大量に定年を迎える時代だそうである。また、地域を見渡すと、後継者のいない老人のみの世帯がなんと多いことか、空恐ろしくなる。

経済的な発展にばかり眼を向けてきた結果、気が付いてみたらいわゆる中山間地を中心に地域社会が崩壊していた

のでは、他国のことを「あの国は、貧しい。」だとか、あれこれお言う資格はないのだろう。

木曾寮に勤務して思うことは多いし、また、たくさんのかたを学ばせていただく機会が与えられたことに感謝したい。

木曾寮が、福祉の一翼を担う施設として、地域の人々とともにこれからも歩みつづけることを願うものである。

平成二十三年新春



カゼルタ王宮にて